

論文の概要および審査結果の要旨

氏名	林口 宏
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第133号
学位授与の日付	2024(令和6年)年3月25日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条
学位論文題目	三州瓦産地の研究 一三州瓦の生産・流通・市場と産地形成を中心として一
論文審査委員	主査 渡邊 秀一（佛教大学教授） 副査 網島 聖（佛教大学准教授） 副査 中島 茂（愛知県立大学名誉教授）

〔1〕論文の概要

本論文は、現在愛知県の伝統産業の一つで、日本の瓦市場において寡占的な地位をもつ三州瓦の産地形成と近代化の過程を、西三河地方を対象にして江戸時代後期から大正期にまで至る期間について考察したものである。伝統産業に関する研究は、産業史・技術史などを含めて伝統工芸というべき分野を中心に活発に行われ、相当の蓄積がある。そうした状況下で取り残されてきた瓦産業の歴史研究を、生産者が残した史料の分析を通して明らかにしようとした意欲的な研究成果である。

本論文には大きな特徴が三つある。第一に、瓦産業の歴史的考察を、生産者であった永坂奎兵衛家、長坂佐次兵衛家、清水善六家の史料を用いて、生産者また瓦職人に焦点を当てて分析を進めたことである。技術論的な考察に陥りがちな先行研究との違いがここにある。第二に、漠然と瓦と総称してきた先行研究に対して、瓦生産・施工における技術革新である棧瓦に焦点を当て、第三に論文構成のうえで棧瓦の生産・流通・消費市場という基本要素をバランスよくとらえていることである。とくに流通・消費市場については、水運輸送による江戸市場との結合が言われていながら、それを実証する論考を欠いていた。この点でも本論文の意義は大きい。

以下では、本論各章の概要を紹介しておく。

第一章 三州瓦師永坂奎兵衛家の瓦づくり

第一章では、天明年間（1781～1788）より太平洋戦争まで、碧海郡棚尾村で七代にわたり三州瓦の生産を行ってきた永坂奎兵衛家の文書を検討し、同家における徒弟から瓦師（瓦職人）、また職工に至るまでの育成プロセスや瓦生産工程における分業体制を、また瓦生産の機械化が進行する以前の瓦生産の実態について、生産に必要な施設や技術とともに検討している。

同家文書によれば、永坂家の開業は京都で瓦製造技術を身につけ帰村した天明8年（1788）で、棚尾村の村明細帳によれば瓦生産者として享和元年（1801）から記録に現れ、文政11年

(1828)には瓦窯師がつくる株仲間の一員となるまでに成長している。

永坂左兵衛家文書には文政5年(1822)を最古に男女合わせて27通の年季奉公請状が残されている。それによると、半数が棚尾村の出身者であり、残る半数も周辺地域からの奉公人である。また、27人のうち13人は「弟子入」で、奉公期間は7～10年、幕末期には最大9人、平均的に6人前後の奉公人がいた。さらに、27通の年季奉公請状には給金の異なる奉公期間一年以下の職人8人が含まれていた。

永坂家では棚尾村内で粘土を採取し、燃料となる薪を三河一帯から購入して、職人(職工)たちは土打・挙師(瓦師)・鬼板師・窯焼(釜焚き)と生産工程に応じて分業化し、達磨窯で焼成していた。窯焼については親方が担当することが多いが、永坂家では専門の職人を雇用している。また、鬼瓦の製造には鬼瓦師を雇用していた。焼成された瓦は知多湾岸地域の廻船によって江戸(東京)にも出荷されていた。天保11年(1840)から慶応3年(1867)までの廻漕量をみると、大火の発生などの一時的要因を除けば変動量が少なく、安定した市場を確保していた様子がうかがえる。

永坂家は天明年間に京都から新しい瓦製造技術を導入し、自ら瓦生産に従事するだけでなく、弟子の育成を通してその技術の普及に貢献している。また、江戸の大火後には生産地問屋の役割も果たし、市場開拓にも努めている。筆者が永坂家文章の分析を通して示したことは、瓦の生産・流通・消費市場の獲得という西三河地方における瓦産業の発展プロセスそのものである。

第二章 江戸市場と三州瓦

第二章では、長坂佐次兵衛家文書の検討を通して、江戸における瓦市場の拡大と関連づけて、西三河地方における棧瓦の生産、江戸及び周辺の製瓦状況、江戸方面への参入の時期、江戸への輸送方法について、なかでも三州瓦産地形成の要因の一つとされる、江戸市場との関りに焦点をあてた考察を展開している。

筆者は西三河地方における瓦産業の発展の契機を、江戸幕府が防火対策として町方に対して享保5年(1720)に「土蔵造或ハ塗屋並瓦屋根ニ勝手次第」と触れ、武家方に対しては享保8年(1723)から「軽キ瓦」(棧瓦)の屋根への転化を図ったことにより江戸に巨大な瓦市場が形成されたこととしている。また、先行研究に依拠しつつ天保年間(1830～1844)の江戸における瓦屋根の普及状況を確認したうえで、江戸および周辺地域における瓦の生産状況を概観し、巨大な江戸の需要を満たす生産力がなかったことを指摘している。

江戸における巨大な瓦市場の形成を受けて、天明年間以降に西三河地方における棧瓦製造技術が導入されたこと、天明期以降の瓦職人の増加を瓦職人たちが組織した太子講に関する史料から確認し、第三節で文政12年(1829)に発生した江戸大火後に焼失した本多下総守江戸藩邸の再建のための大量の瓦注文を受けた西三河地域の対応を、長坂佐次兵衛家文書を用いて分析している。この時期までに西三河では棧瓦技術が広がっており、瓦問屋を頂点に瓦職人同士を結び付ける人的ネットワークがあり、重層的な生産協力体制が機能しはじめていたことから、江戸で需要が高い棧瓦の大量生産が可能であったことを指摘した。

第三章 三州瓦産地における窯業機械導入の要因

第三章は、三州瓦産地において大正期に開発・生産されるようになった窯業機械を導入した要因を明らかにすることを目的としている。第一節では明治期以降の耐火建築への転換政策によって煉瓦とともに瓦の需要が地方都市に拡大していったことを踏まえて、明治期および大正期の全国的な瓦生産量の増加の推移から、大正期に入って手作業による瓦生産から窯業機械の導入に伴って各地に地元名を冠した瓦産地が出現し、機械化によって西三河の瓦産地を上回る高い生産性をもつ産地も出現していたことを指摘している。このことは、西三河地方の瓦産地が、新たに現出した多数の産地との競合に直面し、かつ生産性の点で問題を抱えていたことを示している。加えて、大正期には鉄道・自動車といった陸上輸送機関の発達によって、瓦消費市場の獲得に大きな役割を果たしていた水運は終焉の時代を迎えていた。以上の点から、筆者は大正期を西三河瓦産地の地位が相対的に低下した時期と位置づけている。

三州瓦産地の西三河地方でも製瓦業者が集中する碧海郡新川町および周辺地域で鋳物師、鍛冶師という伝統技術をもつ職人たちによって、大正期に土練機、製瓦機、荒地製瓦機の試作、生産が始まっていた。他府県に比べて窯業機械の導入がやや遅れ、他の瓦産地との競合が強まる中で、西三河地方の製瓦業者は生産性を高めかつ安価な瓦の量産をめざして積極的に窯業機械を導入するようになったと論じている。

第四章 明治・大正期における製瓦業 —清水善六家文書を中心に—

第四章は、三州瓦産地の碧海郡小垣江村（現刈谷市）の清水善六家文書から、三州瓦産地における窯業機械導入が瓦生産に及ぼした影響を明らかにすることを目的としている。同家文書には明治・大正期の瓦価格、職人（職工）賃金、燃料費、土練機、荒地製瓦機、製瓦機等窯業機械の導入時期、米価等の詳細な記録が残されている。

清水善六家文書によれば、清水善六家の窯業機械導入の最初は明治45年（1912）の石油発動機を動力とする土練機であった。次いで導入された窯業機械は電動の荒地土練機・製瓦機であったが、その導入時期は大正11年（1922）に小垣江村に通電が開始された2年後のことであった。また、棚尾村の永坂奎兵衛家における窯業機械の導入も大正8年（1919）に始まり、大正10年代に急速に進んでいる。以上の点から、西三河地方における主要な瓦生産者の窯業機械の導入は他府県に比べて明らかに遅れていたことが明らかになった。

以上の結果を受けて、筆者は窯業機械の導入が瓦産地に及ぼした影響を、生産量の増加だけでなく、生産技術、瓦生産者の経営状況の面から検討している。窯業機械の導入は技術的に言えば土練りなどの重労働から職工を解放したが、熟練技術をもたない工場あたりの職工数の減少をもたらすと同時に、生産者の増加によって未熟練工の就業機会の増加をもたらしたとし、大正期は熟練技術を持つ職人から窯業機械を使いこなす職工へと向かう時代であったと位置づけている。また経営的には、瓦は大正期における瓦販売価格の変化に基づいて経済動向や災害の影響を受けやすく、時期により価格の変動が大きかったこと、大正期を通じて職人あるいは職工の賃金が大きく上昇していったことなどが要因となって収支が赤字に陥る年もあり、経営的な難しさがあったことを指摘している。

〔2〕 審査結果の要旨

以上のように、本論文は天明年間から大正期までを対象期間として西三河地方の瓦産地について、瓦生産の組織化と製造工程における機械化のプロセス、主要市場となった江戸市場との関係、物流ルートとしての江戸廻船利用の実態分析、近代における陸上交通体系の整備による全国的な産地形成の中で発現した産地課題などを、分厚い史資料によって裏付けた高度に実証性を備えた研究成果である。

しかしながら、いくつかの課題が残されている。以下に所要な点を列挙しておく。

- ① 論考の前提となる原料粘土の三河地方における分布状況やその特性、瓦製造工程および窯の特性、製造技術に関する用語などについて十分な記述が行われていない。また、農業生産を基本とする時代において西三河地域で瓦生産者が増加した地域的な理由についても記述がない。そのため、一般的な瓦製造に対する三河地方の瓦製造の特性が分かりにくくなっている。
- ② 筆者は瓦生産者たちが組織した株仲間や講を構成員以外の生産者を排除するものとみなす記述をしている。しかし、これらの組織の構成員は地域のリーダー的な生産者であり、組織外の生産者との間に取引や協業関係があったのではないか、また需要急増期における買い回り先と需要減退期の休眠業者といった生産のバックアップ機能的利用があったのではないかなど、なお検討する余地がある。
- ③ 棧瓦の生産に焦点を当てたことは筆者の分析の独自性の一つである。しかし、そのために分析時期が天明年間以降となって、享保年間に形成された江戸の巨大市場への参入プロセスが検討されないままに残されている。
- ④ 近代の統計資料に基づいて明治・大正期の瓦生産量の変化を追うなかで、「府県物産表」（明治7年）などに触れることなく長い空白期間があること、「府県統計書」および「帝国統計書」ではなく、その原資料「農商務統計表」を用いるべきではなかったかということ、また統計表で用いられた「職工」について機械を使用する工場労働者を「職人」と呼称することが馴染まなくなったため、工場労働者として「職工」と改めたとする点など、統計利用上の注意が必要と思われる点が散見する。

本論文は以上のような課題があるとはいえ、従来必ずしも明らかでなかった三州瓦産地の発展と近代期以降の発展を精緻な分析によって明らかにし、産地の成立・形成過程の解明という研究課題に的確に対応した内容となっている。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判定する。